

# 吹上遺跡出土品

# 重要文化財指定記念展示

## 吹上～弥生時代のヒタを治めた人々～

平成22年3月19日、国の文化審議会において、日田市小迫の吹上遺跡から出土した銅剣や貝輪などの装飾品、甕棺墓など計577点が国の重要文化財に指定されるよう答申を受けました。市内の重要文化財としては11件目、そのうち考古資料では初めてで、しかも発掘調査による出土品で指定を受けるのは県内でも初めてです。今回、重要文化財の指定を記念して、対象遺物を中心に展示を行います。



主催/日田市・日田市教育委員会 会場/日田市民文化会館「パトリア」ギャラリー



### ◆遺跡概要

遺跡は日田盆地北部の通称吹上(ふきあげ)原(ばる)と呼ばれる標高約140mの独立した台地上に位置し、古くから土器片や黒曜石などが散布する場所として知られていました。

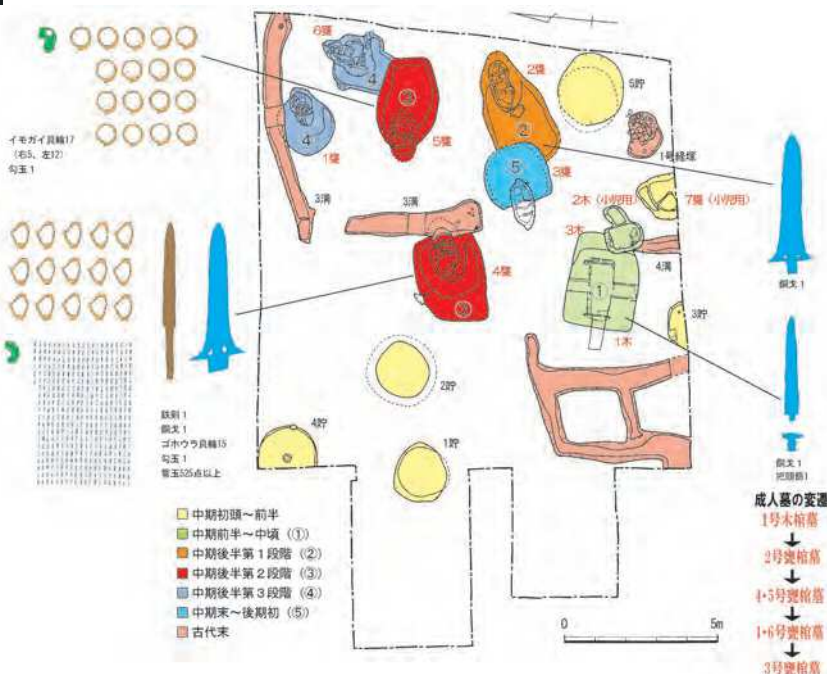
周辺には弥生時代前期～中期の集落と後期後半～古墳時代初頭の環濠集落や豪族居館が確認された国史跡の小迫辻原遺跡、後期後半～古墳時代中期まで続く総数200基を越す甕棺墓・土壙墓・方形周溝墓などの墳墓群が確認された草場第2遺跡、弥生時代前期後半～後期初めの集落跡や墳墓群が確認された朝日宮ノ原遺跡、弥生時代前期～後期にかけての大集落遺構や墳墓群が発見されている後迫遺跡が所在しています。吹上遺跡を取り囲む一帯は、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が密集している市内随一の地域といえます。

古くは昭和28年頃に別府大学賀川光夫先生によって調査報告されたものもありますが、本格的な発掘調査は、昭和54年から平成12年の間に計11回行われています。なかでも、平成7年度の吹上遺跡6次調査は、青銅製の武器類や装身具などの豪華な副葬品を伴った墳墓群が発見されたことにより、一躍脚光を浴びました。





調査区全景



遺構全体図

◎6次調査の概要

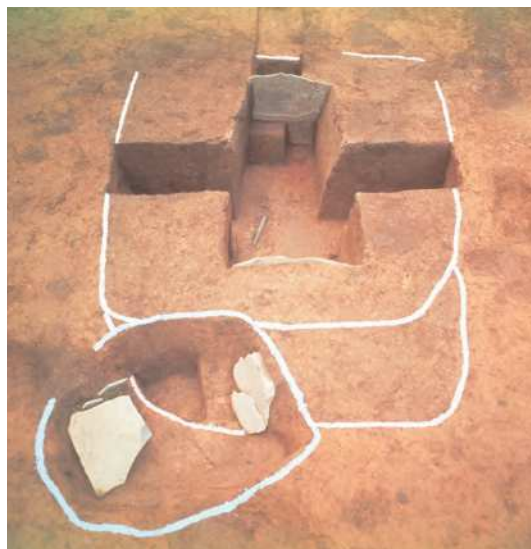
調査はNTTドコモ（当時NTT九州移動通信網株式会社）の無線基地局建設に伴い、平成7年5月～平成8年1月にかけて227㎡を対象として行われました。調査場所は台地の東南端部にあたり、ほぼ平坦な台地のうえでも比較的高まった、市街地を一望出来る絶好の位置にあります。

調査では狭い範囲の中から、複数の時代の遺構が発見されました。主な遺構としては、弥生時代中期初頭の貯蔵穴5基、土坑10基、小児用甕棺墓1基、中期前半～中頃の木棺墓3基、中期後半～後期初頭の甕棺墓6基が出土しました。また、平安時代後期の経塚1基やそれらを区画するような溝も確認されています。

これらの遺構のうち、弥生時代の4基の墳墓からは青銅器や鉄器などの武器類、南海産の貝輪や玉類などの装身具が副葬品として出土し、3基の甕棺墓には被葬者である人骨も残存していました。なかでも人骨に着装されたまま発見された貝輪は、ゴホウラ製とイモガイ製のものが男女で使い分けられており、当時の貝製装身具の着装状況や葬送儀礼の実態を知る上で欠かせない貴重な資料です。

また、平安時代の経塚からは経典を納めた経筒のほか、合子や刀子なども一緒に出土しています。

このような重要な遺構の存在が確認されたことから、緊急調査から保存を前提とする重要遺跡の確認調査に切り替え、最終的には対象地の保存措置が取られた後、県史跡に指定されることになりました。



◆1号木棺墓

この墓は4号甕棺墓の南側にあり、他の木棺墓などと重複していますが、検出状況から3⇒1⇒2号の順に作られたことが分かっています。

1号木棺墓は成人用の墓と推測され、墓壇の中心には両小口に偏平な大石をたて、両側板を木板で挟み込む長さ1.9m、幅75cmの木棺が据えられていました。

木棺内には、被葬者の頭と考えられる位置に多量の朱がまかれ、埋葬の際に頭部に朱がかけられたものと推測されています。被葬者の右腕付近と推定される棺内中央南側には細形銅剣と青銅製十字形把頭飾（柄飾）が各1点出土し、手に握られたような状態で埋葬されたのではないかと考えられます。

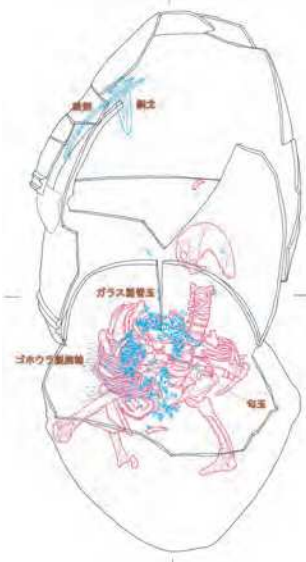
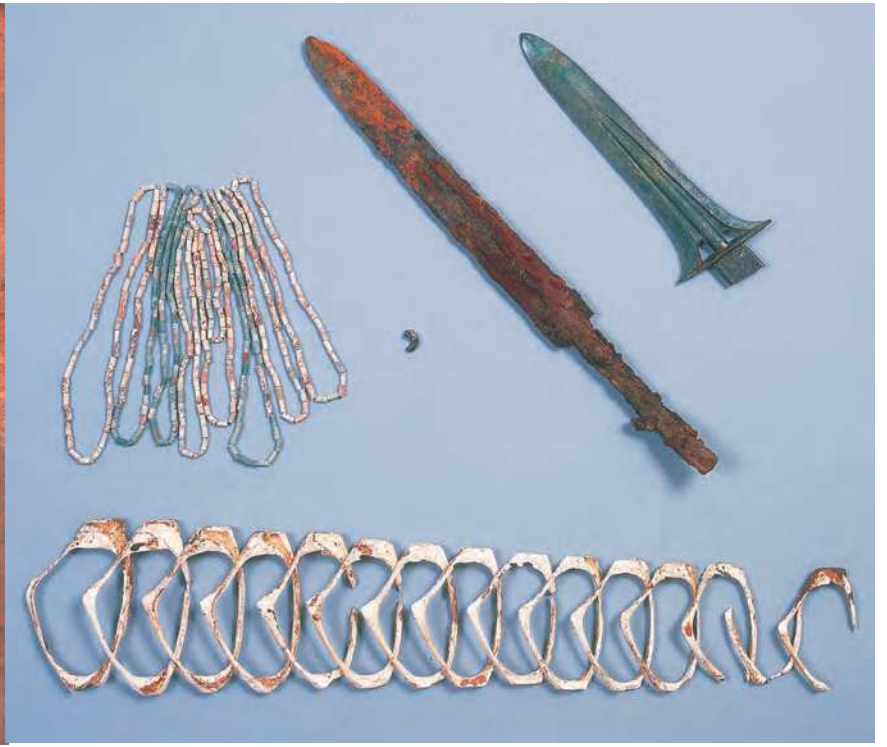
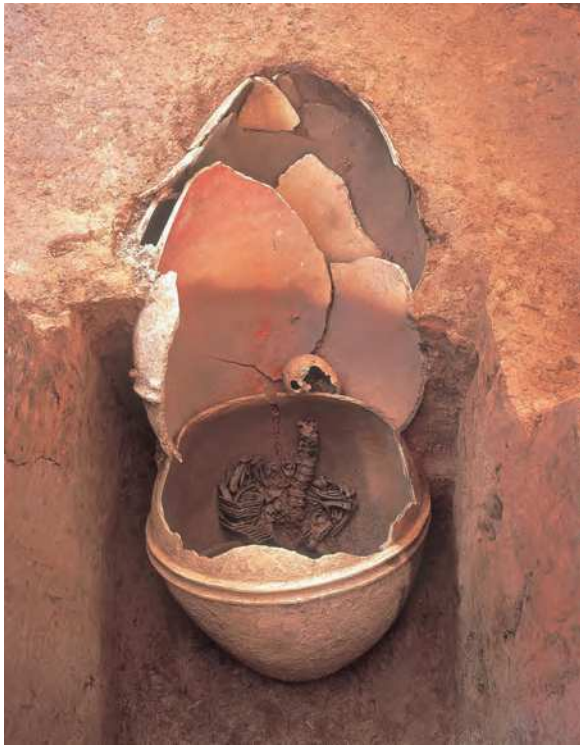


◆2号甕棺墓

この墓は調査区北西側に位置し、3号甕棺墓に切られている。墓壇（ぼこう）が長さ約3.1mと大きく、上面には標石（ひょうせき）の可能性が想定される河原石があり、一部甕棺の直上に崩落していました。

甕棺の接合部南側には中細形銅戈副葬されていました。甕棺の高さは上甕が85cm、下甕が92.2cmを測り、その大きさから成人用と推測されます。甕棺が崩落して開口していたためか、人骨の残存は確認されませんでした。墓壇の大きさや位置関係、土器の形などから、1号木棺墓の後に築造された墳墓と想定されます。





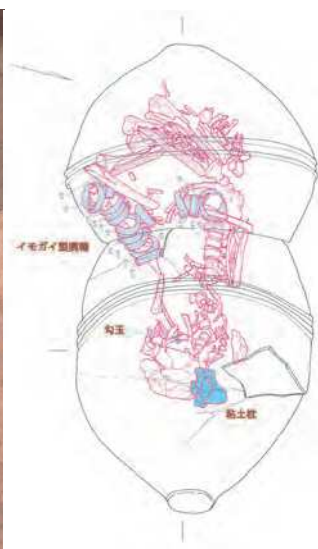
#### ◆4号甕棺墓

この墓は調査区のほぼ中央部に位置し、5号甕棺墓と向かい合わせのような状態で発見されました。墓壙(ぼこう)が長さ約3mと大きく、合口の甕棺の外側には、副葬品を納める部屋を設けるため、外甕を被せるという特殊な構造をしていました。この外側の甕の中には鉄剣1口と細形銅戈1口が納められていました。

合口(あわせぐち)の甕棺は、高さはその他の甕棺とかわらないものの、胴回りが約76cmと墳墓群中で最も大きいものとなります。甕棺内部には成人男性の骨が残り、その右腕には南海産の巻貝であるゴホウラ製の貝輪が15個装着されていました。さらに副葬品として525点の管玉と硬玉製勾玉1点の装身具が出土し、男性被葬者を飾っていたものと思われます。

6次調査の墳墓群のなかでも最も豪華な副葬品が埋納されており、土器の形や位置関係などから、5号甕棺墓の被葬者と一緒には埋葬された有力人物と考えられます。

北部九州のクニグニとの交流を通じて、南海産の製品やガラス製品といった宝器を入手できる権力を持った人物が出現しつつあることが伺えるのです。



#### ◆5号甕棺墓

この墓は調査区の東側に位置し、4号甕棺墓と向かい合わせのような状態で発見されました。

合口(あわせぐち)の甕棺内部には成人女性の骨が残り、南海産のイモガイ製貝輪が右腕に5個、左腕に12個装着されていました。さらに副葬品として首の付近からは硬玉製勾玉1点が出土しました。

土器の形や位置関係などから、4号甕棺墓の被葬者と一緒には男女ペアで埋納された、司祭者的権威にもとづく人物ではないかと推測されています。

また、4・5号甕棺墓は、6次調査で最も卓越した副葬品を有するものの、埋葬は他の墳墓群と同一墓域内で行われています。このことから、他と隔絶した構造を持つ特定主体墓(王墓)が出現する直前の有力者層の墓であると考えられ、王が出現する直前の社会的様相を知ることが出来る貴重な手がかりであると言えるのです。



#### 指定物件

銅剣(把頭飾付)1点、銅戈2点、鉄剣1点、ゴホウラ貝輪1点、イモガイ貝輪1点、硬玉勾玉2点、ガラス管玉525点、甕棺14点

年代	時代	区分	主な出来事	日田の出来事	中国		
BC500	縄文時代	晩期			春秋		
BC400	弥生時代	早期	北部九州に水稲耕作の技術が伝わる	吹上遺跡や小迫辻原遺跡に弥生集落が登場する	戦国 BC. 403		
BC300		前期	前半		北部九州に大型成人用甕棺墓が出現	秦 BC. 221	
BC200			後半				前漢 BC. 202
BC100		中期	前半		青銅器が複製される 青銅器の生産が始まる BC108 武帝が朝鮮半島に楽浪郡など4郡を設置 この頃、倭は百余りの国に分かれていた 多数の前漢鏡を複製した王墓が出現する	新	
AD1			後半				後漢
AD100		後期	前半		57 倭奴国王、後漢に遣使、金印をもらう	後漢	
AD200			後半				107 倭国王帥升等、後漢に遣使 倭国乱れる
AD300		古墳時代	前期		239 邪馬台国の女王卑弥呼が魏に朝貢する	長者原遺跡など市内に環濠集落？が出現	魏・呉・蜀
AD300							
AD300		古墳時代	前期		大型の前方後円墳が作られる		

## ◆吹上遺跡の時代背景

弥生時代は、大陸文化の影響を受け、日本国内に国家的なまとまりが次第に形成されていく時代です。このクニと呼ばれるようなまとまりは、中国の史書（漢書地理志）において、『楽浪（らくろう）（紀元前108年に設置された漢の出先機関）海中に倭人あり、分かれて百余國（ひやくよこく）と為る。歳時（さいじ）を以て来り献（けん）見（けん）すという。』と記載されていることから、紀元前1世紀頃には既に出現していたことが窺えます。

このような時代にあたる吹上遺跡の墳墓群は、国家形成の初期段階における地域の様相を示し、弥生社会がどのように発展していったかを知る重要な手がかりであると言えるのです。

## ◆おわりに

以上のような木棺墓や甕棺墓などで構成される複数の墳墓うち、副葬品を有する4基の甕棺・木棺墓は、墳墓群の中心に位置して順番に築造されており、また、副葬品の構成が北部九州の他地域の有力者の墓と類似していることから、当時の日田を治めた有力者層の存在が推測されます。

なかでも、これらの副葬品が発掘調査で出土する例は少なく、また、被葬者である人骨と共に発見される例は非常に稀であります。特に、貝輪の具体的な装着状況を知る事が出来る点では学術的価値が非常に高いものといえます。このように弥生時代の葬喪儀礼の実態に関する良好な情報を提供できる非常に貴重な事例であるため、重要文化財に指定されることになりました。

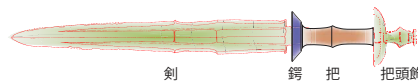
## 《用語解説》

### 甕棺

一般に甕を利用したまたは甕形に作った容器に遺骸を納める棺を意味し、これは各時代にも行われたが、考古学の上ではとくに弥生時代に素焼きの大型の甕を単独または2個を合わせ口にし、遺骸を収めた棺を対象とする。日常容器を転用して新生児や死生児を納めた例も見られるが、九州北部に特徴的なのは成人用の専用棺である。

### 把頭飾

銅剣の柄頭にあたる部分の装飾品。吹上遺跡例では、出土状況から有機質の柄が付いていたものと推測され、その先端に把頭飾が付いていたものと思われる。



甕棺埋葬方法

### 銅戈

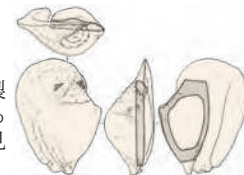
弥生時代の青銅利器でのひとつ。この形態は、古代中国の長柄などをつけた斬殺用の利器を祖形として朝鮮半島で出現し、日本に伝わったもの。主に北部九州に多く見られる。



銅戈着装例

### ゴホウラ製貝輪（立岩型）

奄美諸島以南の南海の暖地に生息する腹足綱のソデ貝科の大型巻貝ゴホウラを素材とした貝製腕輪。多くは沖縄方面で製作された製品・未製品が北部九州などに搬入されたものと考えられる。多くは弥生前期から中期後半にはぼおさまり、甕棺の被葬者に装着されているが、有力者と見られる男性の右手に装着される例が多い。



ゴホウラ製貝輪の製作  
灰色箇所を切り取り加工

### イモガイ製貝輪（横型）

奄美諸島以南の南海の暖地に生息する腹足綱のイモガイ科の円錐形貝を素材とした貝製腕輪。多くは沖縄方面で製作された製品・未製品が北部九州などに搬入されたものと考えられる。女性に装着される例が多い。

イモガイ製貝輪の製作  
灰色箇所を切り取り加工

### 経塚

写経を供養するための1形態で、経典を埋納したところ。山岳や神社・寺院の境内あるいは高燥地など、多くは霊地・聖地とされたところにある。一般的には経典を経筒に納めて外容器に入れ、それを土坑または小石室に埋納し、上を土石で覆う。土石が塚状を呈することもあってこの名がある。経典の埋納は弥勒が現世に出現するまで経典を保存する事を目的として始まり、ついで追善・逆修供養のためのものが現れるようになる。

※《参考文献》木下尚子『南島貝文化の研究』・『小郡市史』・岩永省三『歴史発掘⑦ 金属器登場』